

四国お遍路の旅 2020



2020年12月

旅のチカラ研究所 植木圭二

四国八十八霊場を9日間でいっきにジャンボタクシーで巡るというパックツアーがあったので妻と行ってきた。今回の旅はお遍路という側面、四国一周という側面、さらに参加者たちとの呉越同舟の旅という側面で実に面白かった。その旅を時系列で紹介したい。

序章 4年に1度のチャンス

■旅のきっかけ

旅行会社のパンフレットを見ていたら「全周 逆打ち！四国八十八ヶ所お遍路の旅 9日間」という面白そうなパックツアーが目にとまった。もちろんGoToトラベルキャンペーン(以下GOTO)が使えるので安くなり、9日間で四国を一周して88の寺を一気に参拝することができる。

私は四国には10回以上、夫婦一緒でも6回は訪れている。ただそれらは日本一周などで立ち寄った“ついで”ばかりだった。一度は四国を目的にした旅行をしたいという思いがあった。

今から7年前に私の母、義父、叔父の3人がともに88才で亡くなった。母の四十九日の法要を行った寺で「関東八十八ヶ所霊場巡り」のポスターを見て88という数字に興味を湧き、その霊場巡りに出かけた。移動手段はマイカー、休日を選んで巡った。

その旅の中である住職から「小豆島八十八ヶ所」を強く勧められた。その理由は海と山と瀬戸内海という小豆島の見事な景観と手頃なサイズ感で、夫婦で小豆島を歩いて巡った。

どちらの旅も夫婦二人だけの自己流の巡礼旅で、巡礼というよりも半分以上が観光目的の旅だった。

今回の旅は先達(巡礼を導く人)も付いたお遍路専門の旅で、私たちにとっては今まであまり経験していない旅になる。

■四国八十八霊場巡りとは

讃岐の国で生まれ、後に弘法大師と呼ばれる空海が四国各地で修行したのは今から 1200 年くらい前で、そこから空海にあやかって四国各地の寺を巡礼する旅が始まったらしい。その旅をする人たちをお遍路と呼び、お遍路はあたかも空海と一緒に修行の旅をするという意味で同行二人（どうぎょうににん）という言葉も生まれた。

当初の寺の数は 88 ではなかったらしい。それが 88 になったのは江戸時代初期なので 400 年くらい前だろう。その時には順番も今のように 1 番から 88 番まで決まったらしい。

それでは今まで一体どのくらいの人たちが四国のお遍路をしてきたのだろうか。

四国のお遍路は年間 10 万人とも 30 万人と言われていて正確な数はつかめないが、1 日の参拝者数を 300 人とすると年間約 10 万人になる。1200 年間続いているから、延べ人数は 1 億人を超えることになる。それはほぼ日本の人口に匹敵する。

今年は 4 年に一度の閏年で、閏年の巡礼は 1 番からではなく 88 番から逆打ち（逆回り）をするとご利益が 3 倍になるといわれている。それゆえ私たちの今回の旅は香川県東部にあるさぬき市から時計の針と反対回りで四国を一周する。

第一章 香川県 88 番から 66 番

■最初の巡礼 88 番

朝早く自宅を出て新幹線に乗り 9 時に新大阪駅に着いた。そこにはジャンボタクシーが待っていて、それに乗って淡路島経由で四国に入った。途中のサービスエリアで先達を兼ねた運転手から巡礼の作法を教えてもらった。

最初の寺、第 88 番の大窪寺にやって来る。この寺は香川県さぬき市の山の中腹にあって階段も多い。

順打ち（順回り）ならば 88 番のこの寺が最後になるので、寺の前には土産物屋、食事処などの店がいくつかあってマラソン大会のゴール地点のような雰囲気が漂っている。しかし私たち逆打ちにとってはこの寺が最初で、気を引き締めて山門に向かう。

山門で記念写真を撮る。まだ来たばかりなので普通の格好をしている。



<第 88 番 大窪寺の山門前>

■参拝の作法

早速教えてもらった作法で参拝する。まず山門の入口で立ってお辞儀をする。この時に門の左側に立たなくてはならない。手水（ちょうず）で手を洗って、鐘をつく。鐘はつかなくても良いが「参拝に来ました」という合図なので帰る時にはついてはいけない。

続いて本堂では火の付いたろうソクと線香を供え、事前に住所氏名や願い事を書いておいた納札（おさめふだ）を奉じて賽銭を入れて拝む。賽銭は投げ込まず、“置く”という感じで賽銭箱に優しく入れる。

そして先達の後に続いて開経偈（かいきょうげ）や懺悔文（さんげもん）など7種類の言葉を唱え、その後に般若心経を唱える。続いて寺の真言を唱える。真言とはサンスクリット語ではマントラと呼ばれており、本尊に向かって唱える呪文のようなもので、本尊によってこの真言は異なる。真言の後に御宝号「南無大師遍照金剛」、そして最後に回向文「願わくは、この功德を以って普く一切に及ぼし我らと衆生と皆共に仏道に成ぜん」と唱えて終わる。

これらの一連の作法を本堂と太子堂で2回行う。ただし大師堂では真言は唱えなくても良いことになっている。大師堂は弘法大師空海が祀られているので不要とのことだ。

この2回を合わせると20分くらいの時間を要する。

それにしても最初の参拝は右往左往して、全くもってたどたどしいものになった。

■般若心経とは

参拝で唱える文言は、回向文以外はさっぱり理解できない。それでも般若心経には多くの時間を割いており、それを理解しないのではあまりにもったいない。

般若心経について簡単に言うと、般若という本質を見抜く力によって波羅蜜多（はらみた）という悟りの境地に至ることだという。

本質を見抜くために空（くう）という概念が重要で、空とは実体がないことを意味する。全ての物事は変化し、変化するがその本質は変わらずに存在し、つまり物事に執着せずに、ひとつの価値観に捉われてしまう必要はないとも言っている。

般若心経は本質を見抜いて自ら悟りを得るという、いわば自力本願の考え方なので他力本願の浄土真宗や、妙法蓮華経のみ認めている日蓮宗では唱えることはない。

その代わり修験道や神道でも唱えられることもあるから、自分の意思で人生を切り開いていこうという人にとってはありがたい経と言ってもよい。

■初めて昼食、そして道具

昼食は寺の前のうどん屋に案内された。「打ち込みうどん」が名物で旨いというので注文すると大きな鉄鍋が出てきた。鍋の中は独特の白味噌スープに野菜、豆腐、肉などをうどんと一緒に煮込んだもので、これがなかなか美味い。思わず汁まで全部飲み干してしまった。

値段はやはりと言うか 880 円だった。

尚、このツアーでは昼食は全て自前で、朝食は全てついていますが夕食は泊まる宿によっては付いていないこともある。

次の寺に行く途中で売店に立ち寄る。私たち夫婦は白衣（はくえ）と袈裟、御朱印を記帳してもらい納経帳を買った。納経帳には先ほど行った 88 番の大窪寺の御朱印が既に押されている。

それなりの金額になったが、この店では GOTO の地域クーポンが使えるからありがたい。他の人たちは納経帳以外に記帳・押印してもらうための白衣や掛け軸も買っている。

納経帳は個人巡礼の場合には自分で納経所に持ち込むが、団体の場合には納経所が混雑するのと時間の節約のために参拝中に運転手が納経所に持って行って記帳・押印してもらうという仕組みになっている。

■初日の午後 87 番～85 番

昼食も食べ、衣装も道具もそろったので、いよいよ本格的に参拝、巡礼が始まる。

せっかく 88 の寺を参拝するので、全ての寺について何かしらの感想を残して置くこととしよう。

第 87 番、長尾寺は琴電の長尾駅近くで、街の中にある。

第 86 番、志度寺は琴電の志度駅に近い街の中の寺で、境内は高い木々がうっそうと茂っていて広くて迷子になりそう。それでも五重塔や庭園もあるから立派な寺で、寺の前にはエレキテルで有名な平賀源内の墓所もある。

第 85 番、八栗寺は五剣山の上であって、ケーブルカーで登る。ケーブルカーは昭和 39 年製造と書かれているから相当に古い。その年は前回の東京オリンピックの年で、もちろん閏年だった。

紅葉が綺麗で宝塔に映えている。ただし紅葉を見ることもなく運転手は焦って寺に駆け込んだ。それは夕方 5 時が寺の受付時間で、それまでに納経所に入らなければいけないからだ。



<ケーブルカー>

この時刻は今後も気にしなくてはいけない。

特に逆打ちは順番の変更が許されないというので、コース取りで工夫することが出来ない。

■ジャンボタクシー

私たちが参加したパックツアーはジャンボタクシー 2 台で 88 寺を巡るというもので、私たちの乗る 1 号車には運転手以外に私たち夫婦をいれて 7 人、2 号車には 6 人が乗っている。

1号車の運転手が先達を兼ねており、参加者と一緒に参拝をして般若心経などを唱えるのをリードしてくれる。2号車の運転手は納経所に御朱印帳、白衣、掛け軸を持ち込んで記帳・押印してもらうという役割で、その分量は結構なものなので大きなバッグに入れて担いで持ち込んでいる。

この1号車と2号車が連携して行程をこなしていくので、13人のパックツアーということになる。

ジャンボタクシーは高知ナンバーで、白い車体に紫、緑、黄のストライプが入って「丸中タクシー」と書かれている。

14人乗りのワゴン車の最後尾の座席を取っ払って10人乗りに改造したもので、ゆったり乗ることができる。

バックドアを跳ね上げると最後尾の部分には乗客の荷物を積み易くするように木製の3段の棚が作られている。スーツケースを寝かせて載せるのにいい具合になっている。



<ジャンボタクシー>

■ 願い事

納札に書く願い事について、これが結構大変だということに気がつく。最初は寺ごとに願い事を変えようかと思っていたが、そうすると88もの願い事を書くことになる。そんなにたくさん願い事があるのだろうか。

そもそも仏教における願い事、それも自力本願の宗派では、仏の前で自分の努力を誓うものである。自分の努力の及ばないような願いは叶はずもない。だから宝くじで何億円当たって欲しいなどという願いは的外れなものになる。そのことは関東八十八霊場のどこかの寺で教えてもらった。

それにしても88も無理なので、私は日によって変えようと考えて願い事を9つに絞ることにした。それでも直ぐに思いつくのは2つか3つだった。

私の最初の願い事はやはり健康祈願だ。それも自分で何もしないで、ただ健康にしてくださいというものでなく自分が健康に気を付けるから、見守ってくださいとかお力添えをとったものになる。

■ 2日目 84番～72番

四国お遍路の旅、2日目になる。6時15分に荷物を出して6時30分から朝食、7時20分出発と、まるで海外旅行先での朝のようだ。

第 84 番、屋島寺は瀬戸内海を望む山の上にある。小豆島も見えて景色が良い。

第 83 番、一宮寺には「地獄の釜」と呼ばれる小さな石の祠（ほこら）がある。そこに頭を入れると、ゴーという地獄の釜のような音が聞こえる。

第 82 番、根香寺は階段と紅葉が綺麗な山の上の寺で、牛鬼の像が出迎えてくれる。人里離れた山の上であって、いい雰囲気ので大きくもなく小さくもなく私好みのサイズの寺だ。八十八霊場に入っていなければ参拝客もほとんど来ないだろう。

第 81 番、白峯寺は市街地の小高い丘にあつて、まだ紅葉が綺麗に残っている。

第 80 番、國分寺にはミニ八十八霊場巡りができる。

お昼は坂出のセルフサービスのうどん店に入る。もちろん運転手お勧めの店なので、味も値段も期待どおりだ。特に早く出てきて早く食べ終わるというポイントが重要だ。

かけうどんに天ぷらのトッピング 2 個を付けて 1 人分 360 円と安い。そして旨い。

昔、「恐るべきさぬきうどん」という本があつて、私はその本に結構はまっていたことを思い出した。地元讃岐のうどん好きが“麵通団”というグループを結成して、地元のうどん屋を食べ歩いて店とうどんを紹介する本だった。

その麵通団には心得がいくつかあつて、常に新しい穴場を探すとか、讃岐の生活者の中に生きるうどんのあるべき姿を追求するとかというものだったが、その中で私が最も気に入った心得が「そば屋をバカにしてはいけない」という文言だった。この言葉は奥が深い。

その本によって私は讃岐うどんが好きになり、その当時仕事で高松に行った時には朝から晩まで 6 食もうどんを食べた。

第 79 番、天皇寺は白峰宮という神社と同居している。この神社は崇徳天皇を祀つてあり正面に堂々と鴨居を構えており、その横に寺の入口があつて神社の境内を横切つて本堂に行く。あたかも寺に入る人は鳥居をくぐるなど言っているかのようだ。

調べると、保元の乱により讃岐へ流された崇徳天皇がこの寺に来て、境内に神社が造営された。そのため崇徳天皇寺と呼ばれるようになった。



<白峰宮の見事な鳥居 天皇寺の入口は右にあり本堂は左にある>

第 78 番、郷照寺は坂出の街を見渡せる。境内には女性の神「淡島明神」が祀ってある。

第 77 番、道隆寺は街の中であり、観音霊場として有名で観音像 255 体がある。眼の病気にご利益のある「眼なおし薬師」もある。

この寺で参拝用品を売っており、驚いたことに納札は巡礼回数によって色が違うということが分かった。1~4 回が白、5~6 回が青、7~24 回が赤、25~49 回が銀、50~99 回が金、そして 100 回以上は錦になっている。

もちろん私たちの札は白だが、納札箱をのぞき込むと白以外の色の札もそれなりに多いので、何回もお遍路に来ている人が意外に多い。

そういえば私の知り合いで四国お遍路にはまっている人がいて、7 周目に入ったというから赤い札を納めていることになる。彼とその奥方とはヨーロッパ旅行で知り合ったが、日本にいる時は奥方をおいて、一人で歩き遍路をしているという。

第 76 番、金倉寺には「巡礼七福神」と書かれた人の良さそうなおじいさん(?) 七福神が迎えてくれる。

第 75 番、善通寺は弘法大師の生まれた寺という。五重塔もあり、境内は奈良の法隆寺に似ている。しかし法隆寺よりもはるかに広い。この寺を参拝することを心待ちにしていたのは同じジャンボタクシーに乗っている「姉さん」と呼ばれている人だ。

面白い光景を目にする。境内に「さぬき百選」として老木があるが、私が注目したのはその隣にある「世界人類が平和でありますように」というキリスト教の良く見かける柱だ。これには驚いてしまった。さすが空海、弘法大師は心が広い。

他の宗教も決して否定しないという考え方は、麵通団の「そば屋をバカにはいけない」という心得に通じるものがある。



<善通寺の境内の一部>

第 74 番、甲山寺はウサギの寺で、ウサギのオブジェや屋根の瓦もウサギになっている。

第 73 番、出釈迦寺は眼下に瀬戸内海や讃岐平野を見渡せる。

ここに空海伝説のひとつ「捨身ヶ嶽」がある。空海が 7 才の時にこの寺の背後にある我拝師山に登り「私は将来仏門に入り、仏の教えを広めて多くの人を救いたい。私の願いが叶うなら釈迦如来よ、姿を現したまえ。もし叶わぬなら一命を捨ててこの身を諸仏に捧げる」と、断崖絶壁から身を投じた。すると釈迦と羽衣をまとった天女が舞い降り、空海を抱きとめた。願いが叶うことが分かった空海のその後の人生はご存知のとおりだ。

この話を聞いて“さすが空海”と思う人は現代においては少ないだろう。おそらくは断崖で足を滑らせて落ちたのだが、木の枝にでも引っかかってケガもせずに済んだことが後世になって伝説化されたのかもしれない。

第 72 番、曼荼羅寺は 73 番から降りて徒歩 5 分で行ける市街地の寺だ。

■驚きのオークラホテル

本日の宿泊は丸亀市の「オークラホテル」だ。運転手が事前に言っていたのは「オークラホテルなのでホテルオークラと勘違いしないでくださいよ、がっかりしますから」という言葉が気になっていたが、ここにホテルオークラがあるはずもない。それでもがっかりするほど悪いホテルではなかったので一安心だ。

夕食のレストランにいったら、コロナ対策のためにテーブルと椅子が全て前を向いて並んでいる。いわゆる学校形式のレイアウトで、私は初めて体験する。私たちは一番前に座ると、目の前には先生ではなく、レストランのスタッフが立っている。せっかくなのでスタッフに手を挙げて学校の生徒のような質問すると、スタッフも先生らしく答えてくれる。これは面白い。

大浴場でとんでもない体験をする。私は部屋にあった髭剃りを持って行って、使い終わったのでそれをゴミ入れに捨てて出てきたら、私の捨てた髭剃りを取り出して使っている人がいる。たまたま髭剃りを持って来るのを忘れたからなのだろうが、何の躊躇もしないで取り出し使う行為にただただ驚いてしまった。

■3 日目 71 番～66 番

ホテルの出発は 7 時 10 分の予定だったが、準備でき次第出発ということで、みんなの意識の高まりで 10 分くらい早く出発する。

車に乗って 20 分ほど走ると海沿いの道路に出た。運転手が沖合にある島を指して「あの島がテレビ番組で有名になったダッシュ島」だと教えてくれた。息子の嫁が大好きな番組で、アイドルグループ TOKIO のメンバーが無人島で様々な挑戦をする番組だ。

既にメンバーは40代になっており、確かリーダーは50才だ。人生の岐路に立つ時期でもあるので、それぞれの道を探り始めたのだろう。それはきっとロケの合間にいつかの寺を参拝した結果かもしれない。

第71番、弥谷寺は山の上であり、階段が540段もあって途中まで寺のマイクロバスで連れて行ってくれる。それによって400段はショートカットできる。そのマイクロバスを使っても140段を登り皆は息が上がっている。本日最初の寺なのに今日の仕事は終わったなどと言っている人もいる。ちなみにマイクロバスの運賃は上り400円、下りは200円するが、体力面のこともあるが時間を優先させているのは明らかだ。

第70番、本山寺は重要文化財の仁王門と国宝の本堂がある。寺を出ると71番への案内矢印がある。何故さっき見てきた寺を案内するのか違和感を覚えるが私たちは逆打ちしていることに気がつく。

第69番の観音寺、第68番の神恵寺は同じ敷地にある。これは珍しい。神恵寺の本堂はコンクリートの打ちっばなしでとても寺の本堂には見えない。



<神恵寺のコンクリートの本堂>

第67番、大興寺は山門をくぐって階段を登るとその脇に樹齢1200年のカヤの木がある。

第66番、雲辺寺にはロープウェイを使って行くことになる。全ての交通費は旅行代金に入っているから気にはならないが、往復2200円と結構高い。

ロープウェイは日本最大級で、全長2594mを7分で登って標高916mの山頂駅に着く。気温は一気にさがって3℃しかない。

山頂駅から本堂に向かう途中に五百羅漢がある。見事な五百羅漢で、表情や仕草を一体一体観察すると全てが異なっており手を抜いていない。

同行の若者は我が街「川越」の五百羅漢は完全に負けていると悔しがっている。



<雲辺寺の五百羅漢>

ロープウェイ山頂駅は香川県だが、寺は徳島県にある。この雲辺寺も便宜上香川県の寺と数えると、これまで香川県の 23 寺を訪れてきた。

参拝もだいぶ慣れてきたが、それでも私の唱える般若心経はまだまだごちない。

第二章 愛媛県 65 番から 40 番

■愛媛 65 番～61 番

愛媛県に入る。愛媛と言えば鯛が有名で、本日の昼食は鯛めしだ。到着してテーブルに座ると間もなく釜めしが出てきた。

昨日の車内で運転手が注文を取って予約してくれていた。鯛めしは一人用の小さな釜に鯛を乗せて炊き込んでおり、事前に注文していなければ炊き上がるのに 30 分はかかるだろう。時間の節約とグルメとの両立とは実にありがたい。鯛の香りが漂い、もちろん美味しい。

第 65 番、三角寺は急な階段を登って行く。この名前の由来は三角の池があるからという。

第 64 番、前神寺は滝に打たれる石仏があって、その濡れた石仏の肌に一円玉を投げつけ、その一円玉が濡れた石仏に張り付けばご利益があるという。最初に先達が投げて見事に岩に張り付けた。私も妻も全くダメだったが、同じツアー参加の若者も見事に張り付けていた。

第 63 番、吉祥寺はイチョウの紅葉が奇麗に残っている。

第 62 番、宝寿寺は今までで最もシンプルな寺だ。シンプルと言うと聞こえがいいが、要は貧乏だ。運転手によると、その理由は住職が金に困って仏像などを売ってしまったという。

第 61 番、香園寺の本堂は鉄筋コンクリート製で音楽ホールのように豪華で大きい。般若心経がよく響く。

■温泉宿に泊まる

愛媛県西条市の小町温泉の日帰り温泉と道の駅を併設した温泉旅館に泊まる。

私たちの部屋は12畳の和室で、通常は4人部屋として使っているのだろうが、今回は夫婦2人でゆったりと使える。布団は自分で敷いてくださいと言わんばかりに2組積んで置いてある。

風呂は温泉で、もちろん大浴場で露天風呂もサウナもある。

この宿はまさしくお遍路にぴったりのように思える。今まで泊まったホテルは洋室でベッド、しかも浴衣姿で館内を歩くことも許されなかった。夕食は併設されたレストランで食べることになるが、浴衣姿のままでも食事をとることができるからありがたい。

テーブルに座って私は、いや妻もツアー参加者全員がその料理に驚いた。

並んだ料理をスタッフが説明してくれる。一人用の固形燃料コンロの網にはアルミフویلが張っており、脇には割いた松茸がいくつかあって焼き方や食べ方を親切に教えてくれる。そして愛媛と言えば鯛、鯛の煮つけが存在感を示している。さらにきびなご、サザエや鯛の刺身もある。



<夕食 この他に天ぷらやジュース、デザートも出てきた>

口直して搾りたてのみかんジュースが出てきた。みかんジュースは甘くてジューシーだ。みかんを便宜上オレンジと英語訳するが、この2つは似て非なるもので、明らかにみかんの方が甘い。特に愛媛産のみかんは甘い。

デザートは松山市の沖に浮かぶ興居（ごご）島のみかんだ。このみかんは高価だ。さらに最近開発されたもっと高価な「紅まどんな」も出てきた。実に甘くて美味しい。

とても気に入ったのでGOTOの地域クーポンを使い、箱で自宅や親戚に送った。パックスツアーを使うと食事や交通費が含まれているので、GOTOの地域クーポンを使い切るのに苦労することが多い。今回も夫婦で9万円ももらったから早めに使わないといけない。

■参加者たち

巡礼の旅が始まって既に3日経った。参加者の人と成りが分かってきた。

私たちの1号車には7人乗っている。夫婦は私たち以外に和気あいあいの熟年夫婦が乗っている。旦那を「和気」と奥さんを「アイアイ」と呼んでおこう。そして少し天然のおばさんがいる。そのおばさんを「姉さん」と呼んでいるちょっとだけ若い中年女性がいて、最初私はこの2人は姉妹かと思ったが別々の単独参加だという。「姉さん」と「イモウト」と呼んでおこう。そして男性の単独参加1名いる。私とほぼ同年代で、スキーが好きだというので「スキー」と呼んでおこう。

2号車は全員が単独参加で女性2人、男性4人の6人だ。その女性の一人が真っ先に車から降りて鐘をつきに行くので、まるで鐘つきに命を懸けているようだ。まさしく“あの鐘を鳴らすのはあなた”なので和田アキ子から名前をとって「アッコ」と呼ぼう。もう一人の女性は、しとやかで後ろ姿が観音菩薩に似ているので「カンノン」、男性は若者2名が新潟と川越から来たので「ニイガタ」「カワゴエ」、少し中年のおじさんは「チュウネン」、そしてカメラ片手に同行している「お父さん」と呼ばれる人がいる。お父さんは全く参拝しないので明らかに皆とは目的が違うようだ。プロのカメラマンかと思ったが、本人に聞くとそうではないと言っている。

このメンバーで初めて四国のお遍路をするのは私たち夫婦を含め半数ほどで、残りの半数は何回目かの巡礼だという。

■4日目 60番～49番

宿の大浴場は朝5時30分から入れるとのことだが、私は前日にもっと早く開いているという情報を得ており5時に行くとも誰もいない。独り占めの温泉入浴で巡礼4日目が始まる。

朝食のメニューは鯛茶漬だ。一人用コンロにヤカンがかかっており中に茶漬け用の出汁汁が沸いている。薄く切った鯛の刺身が中央の皿に盛りつけてあり、それをご飯茶碗に乗せて出汁汁を掛けて鯛茶漬けにするようになっている。実に贅沢な朝食だ。

7時に出発する。徐々に出発時間が早まっている。

第60番、横峰寺は山の上にある。車一台やっと通れる綴れ織りの山道をかなりの時間登って駐車場に到着する。ここに来るには大型バスでは無理だろう。おそらくは小さなタクシーに乗り換えて来るしかないだろう。その意味では大型バスはお遍路には向いていないかもしれない。ジャンボタクシーが重宝される所以だ。

山の上の駐車場からの景色が抜群に良い。瀬戸内海と対岸の広島県、そこまで繋がる「島なみハイウェイ」も見える。

駐車場には鳥の餌が置いてあり、この餌で小鳥を呼ぶことができる。これに妻が挑戦した。見事に鳥が妻の手に乗ってくるから、朝から縁起がいい。



<横峰寺の駐車場の小鳥>

第 59 番、国分寺には握手修行大師という石像が立っている。この大師像と握手すると願いが叶うと書かれている。

その横に但し書きがあつて、「願いは一つ、あれもこれもいけません。お大師様も忙しいから」と書かれている。確かにそうだ。

第 58 番、仙遊寺は標高 300m の高台にあるので、今治市内を見渡せる。

第 57 番、栄福寺では面白い映画のポスターが目にとまった。この寺の住職のことが映画化されたもので、タイトルは「ボクは坊さん。」という。住職だった祖父の死をきっかけに書店員の仕事を辞め 24 才で突然お坊さんになった若い住職の話だ。初めて知る世界は驚きの連続で、檀家との関係で悩み、冠婚葬祭などで様々な経験を積むことによって成長していく。主演は伊藤淳史で 2015 年に劇場公開されている。

第 56 番、泰山寺は石垣が見事な寺だ。

昼食は今治市の食堂で食べる。その隣には海鮮野菜果物の市場が併設されており、昨日食べた「紅まどんな」を 1 個 500 円で売っている。それでもこの店は安い方らしい。

第 55 番、南光坊は、寺ではなく“坊”で 88 寺の中でここだけだと先達が教えてくれる。

坊とはもともと僧侶が住む住居で、宿坊などともいう言葉もある。僧侶のことを“お坊さん”と言うのもここからきている。

第 54 番、延命寺は明治維新まで「圓明寺」を名乗っていたが松山市にある 53 番の圓明寺と間違いが多いので延命寺に改名したという。同じ名前では間違えるのは当たり前だろう。

第 53 番、圓明寺は“隠れキリシタン”が崇めた石の像がある。十字架に見えないこともないが、先日まで本場の五島列島に行っていた私にとっては、ちょっと違和感を覚える。

第 52 番、太山寺は鎌倉時代に建立された本堂が国宝に指定されている。

第 51 番、石手寺は松山市街地観光拠点にあり、境内に土産物屋数店あるが閉まっている。

第 50 番、繁多寺はファンタジーとも読める。大きなモミの木があつて、私はクリスマスツリーとして飾り付けてライトアップすると面白いと提案すると、和気とアイアイが賛同してくれた。この寺は境内で交錯するように神社も存在する。

第 49 番、浄土寺は工事中で門がみえない。住宅街にあるが閑静としている。

この寺では両替をしてくれる。ひとつの寺を参拝すると本堂と大師堂で賽銭を 2 回入れることになり、そのため賽銭に使う小銭がなくなっているの、両替はありがたい。再び私の手元には大量の 5 円玉や 10 円玉が入る。

それはある意味リサイクル、いや小銭たちにとっては仏教の教えの一つ“輪廻転生”かもしれない。

■私たちは恵まれている

本日は松山市の中心街のホテルに泊まる。夕食が付いていないので市中に繰り出すことになる。ホテルの出口で偶然にも姉さんとイモウトと出くわしたので、一緒に行きましょうとなった。その直後にひとりの女性が、これも偶然に現れる。

この女性は同じ阪急交通社のツアー参加者だが、私たちよりも1日多い10日間で巡るというコースに参加している。姉さんとは面識があるようなので、旅は出会いから始まるというので彼女もまとめて5人で行くことになった。

松山の繁華街で食事をとったのだが、ここで面白い話を聞くことになる。彼女たちも同じようにジャンボタクシーで巡っているのだが、私たちのジャンボタクシー2台はベテラン運転手2人の連携で快適に行程をこなしている。その役割は既にかいたが先達と納経帳担当になっている。地元のタクシーだから各寺の事情を知っており本堂に近い駐車場まで連れて行ってくれる。

彼女の乗っているジャンボタクシーも1号車と2号車と2台あるが全く連携をしておらず、完全に別々に行動しているという。運転手は寺に着くと納経帳の持ち込みと記帳担当に徹しているので、先達はいない。たまたま10回くらい四国お遍路に来ている参加者のひとりが先達の役をやっているという。

さらに彼女のジャンボタクシーの運転手は大型バスの運転手だったというので小回りを利かすことができない。私たちの車が本堂の近くまで行くのに、彼女たちの車は遠い駐車場に停める。足の悪い人も乗っているので乗客が文句を言うと、運転手は「私は良く分からないし、聞いても教えてくれない」などと言っているという。

それは食事にしても同様で、阪急交通社の行程表にあるホテルや夕食は決められているが、行程表にない昼食は運転手の裁量になっている。私たちの運転手は地元の旨くて安い店に連れて行ってくれるが、彼女の運転手はとんでもないという。

確か松山市内に喜多方ラーメンの店があったが、私たちは車の中で何故ここに来て喜多方ラーメンなのかと話題になった店で、本日の昼食はまさしくその店だったという。大阪から来た彼女は喜多方ラーメン初体験だったようで味を聞くと、とんこつ味でストレート麺だったという。これはとんでもない。喜多方ラーメンは醤油味で、麺はちぢれ麺だ。そもそも東日本がちぢれ麺、西日本はストレート麺と相場が決まっている。これは明らかにおかしい店だ。その味や麺の真偽のほどは分からないが、要は運転手が日頃行っている店に連れて行っただけに過ぎない。

同じような話は次から次へと出てくる。「昨日の昼は何を何処で食べた？」とか質問が飛び交う。彼女の表情は驚きから、落胆へ、そして諦めに変わってきている。

彼女の話を書くにつれ、つくづく私たちは恵まれていることに気が付く。弘法大師に感謝するしかない。いや弘法大師は関係ないか。

■5日目 48番～41番

今日は6時50分の出発になる。寺は朝7時からなので、早く出発することによって参拝の寺の数を稼ぐことができる。

第48番、西林寺は庭が奇麗で全体的によくまとまっている。日本庭園にはサボテンもある
第47番、八坂寺も紅葉が奇麗で、立派な社務所があつて大きな墓地もある。

第46番、浄瑠璃寺には“抱っこ大師”がある。小さな弘法大師の木製の人形を抱っこするとご利益があるというので、妻はすすんで抱っこしていた。牡丹が有名な寺なので運転手がスマホで咲いている時の動画を見せてくれた。

車で5分ほど走ると人形が農作業をしている。運転手の説明では人口減少で農作業をする人が減ったので人形を置いているという。

人形で有名なのは四国の徳島県三好市にある名頃（なごろ）集落で、人間の住民35人に対して人形の住民は350体もある。これからはどの集落でも人形の住民が増えていきそうだ。

第45番、岩屋寺は山岳の寺で駐車場から山登りをするようになる。四国お遍路の寺で最大の難所だと運転手は言う。姉さんとイモウトはヒイヒイ言いながら登っている。20分程登ると崖をくりぬいた岩場に本堂が建っている。



<岩屋寺の参道>



<岩屋寺の本堂>

抜群に景色が良い。

断崖の上にもお堂があり10mほどハシゴを登ると、さらに景色が良い。このハシゴを登るには結構勇気がいる。



<断崖の上のお堂に登るハシゴ>



<お堂からの景色>

今度は駐車場まで登って来た道を降りる。登って来る色々な人たちとすれ違う。寺の電気設備をメンテナンスする人、郵便配達員、小さな子供が元気いっぱい挨拶してくれる。

第44番、大寶寺も山の中、狭い道なので大型バスは下の駐車場に置き、歩くことになるが私たちのジャンボタクシーは寺の直ぐ下の駐車場まで行ってくれる。大阪の彼女はきっと下の駐車場から歩くのだらうと思いながらタクシーを降りる。

境内には20人以上の団体が参拝し般若心経をあげている。先達は女性で綺麗な声が境内に響いている。

四国お遍路の旅は徒歩、自転車、バイク、自家用車、レンタカー、タクシー、バスなど選択肢はあるが、バスやタクシーの類いならば明らかにジャンボタクシーはベストチョイスだろう。

昼食は久万高原の食堂に入る。田舎料理中心のビュッフェスタイルの食べ放題になっている。私たちが食べていると先ほどの団体が入って来て、小さな食堂なので大混雑になった。最後にコーヒーを飲んだが、インスタントコーヒーというのがとても印象的だった。

第43番、明石寺は紅葉が残っている。古い荘厳な本堂で、しあわせ観音がある。

第42番、仏木寺は鐘楼が茅葺き屋根、ペットの供養もしている。

第41番、龍光寺は狭い参道を車で抜けて駐車場に着くと横道から境内に入る道がある。この寺が本日最後になるので私は下まで戻って正面の階段を登る。昨日の大阪の彼女たち一行がいた。

本日はJR宇和島駅直結のホテルに宿泊するが、大浴場はない。フロントで日帰り入浴施設を聞くと、街のビル銭（ビルの中にある銭湯）を教えてもらった。ちょっと狭いがサウナもあって400円は安い。

ホテルで食べる夕食は豪華ではないが面白い試みがあった。鯛茶漬けならぬ鯛の卵掛けご飯で、すき焼きのように生卵をといて鯛の刺身を漬けて漬け丼にする。ここはまだ愛媛県なの鯛が多く出てくる。

■6日目 40番

お遍路の旅も6日目に入った。朝6時50分出発で、まだ暗い。

第40番、観自在寺は愛媛県最後の寺になる。大師堂の周りに四国八十八霊場の砂を入れた踏み石が置かれ、全ての寺の土を踏むことができる。最後に高野山の奥の院の踏み石までである。

第三章 高知県 39 番から 24 番

■高知県突入 39 番~33 番

第 39 番、延光寺は高知県最初の寺になる。この寺の山号は赤亀山なので亀のスタンプを押してくれる。

その昔、竜宮城にいた赤亀が背中に銅の鐘を背負ってきたので僧侶たちは早速これを寺に奉納して、これまでの山号と寺名を「赤亀山延光寺」に改めたという。鐘は高さ 33 cmほどの小さなもので「延喜十一年」と刻まれている。延喜 11 年は平安時代中期なので空海よりも後の時代のことだ。そして明治時代になって高知県議会の開会と閉会の合図に鳴らされたというから由緒正しい鐘だ。

この話もだいぶ尾ひれが付いたようだ。竜宮城の存在も赤亀が鐘を背負うのもどう考えてもありえない。それにここ延光寺は山の中であって海までは相当遠い。

私はこのようなありえない言い伝えができた理由を解き明かすのに時折興味を感じることもある。この話も赤亀がいたことと鐘の存在だけが事実だとすれば、誰かが何も言わずに鐘と赤亀を寺に奉納したのでらう。

第 38 番、金剛福寺は足摺岬にある。大きな寺で、本堂の手前に池があり池の周りに大師堂や各種お堂の他に宝塔、大師像、亀の石像、見事な自然石もある。寺を囲むように南国特有の植物が覆い茂っている。この寺は足摺岬に来た観光客も多く立ち寄るのだらう。

寺の近くに中浜万次郎の大きな銅像がある。ジョン万次郎と言った方が分かりやすいが、この近くに中浜という地名があるからそう呼ばれていたのだらう。

四万十川の畔の道路沿いの鰻屋に立ち寄る。もちろん予約してあるので 2 階のテラス席に座り四万十川を眺めながらの昼食になる。あらかじめ注文しておいた鰻重が出てくる。この上ない場所でこの上ない食事になるが、味は申し訳ないがイマイチで、濃くてそして硬い。焼き方を聞いたら蒸さずに何度もタレをつけて焼くだけだということからこの流儀らしい。それでも清流四万十川の天然鰻と看板に書いてある。

それにしても全員が 3260 円の鰻重を注文するのは、やはり GOTO の地域クーポンが利用できるからだらう。



<四万十川を臨む鰻屋のテラス席と鰻重>

第 37 番、岩本寺は四万十町の市街地にある。この寺には本尊が 5 つあるから珍しい。

第 36 番、青龍寺は 170 段の階段を登って行く。元横綱の朝青龍はこの寺から名前をもらった。彼の母校はこの近くにある明德義塾高校だ。すると階段を登ってトレーニングをしている高校生がいる。相撲部ではないがソフトボール部とジャージに書かれている。

第 35 番、清龍寺には大日如来の像の台座の下をくぐり抜けるアトラクションがある。中は暗く、恐る恐る歩いていくと途中に礼拝所があり光明が開けるようになっている。

この寺は自動車にとっても恐る恐る運転する難所で、狭い急な坂道が長く続く。そんな道は上りよりもむしろ下りが難しいので帰りの下り坂では緊張感が車内に走る。そして坂道を下り終えると車内では大きな拍手が起き、ご苦労様の声が飛び交う。

第 34 番、種間寺は平坦な田舎の民家に混じってある。本日中にもう一つ行きたいと運転手が言うので急いで参拝する。参加者たちはとても協力的になっている。

第 33 番、雪蹊寺は長宗我部氏の菩提寺で、入った時はちょうど 5 時で滑り込みだ。

■高知といえば鰹

本日は高知市の繁華街のホテルに泊まる。夕食は運転手一押しの料理屋「明神丸」にやって来た。鰹のタタキならこの店が一番だという。

実はこの店を私たち夫婦は 2 年前から知っていた。ヨーロッパ、バルト 3 国に行った時に偶然飛行機で隣の席に座った人と意気投合して、高知在住の彼から鰹のタタキが我が家に届いた。それがこの明神丸のもので、実に旨かったことを覚えていて高知に来たらその店を訪ねてみようと思っており、本日その願いが叶った。

もちろん鰹のタタキを注文した。塩タタキと呼ばれもので、火で炙って粗塩をふっただけのものだ。それにお好みでミョウガ、ニンニク、ネギを加えて、柚子果汁やポン酢醤油で食べるのだが、どれをどう組み合わせても旨い。それは鰹そのものと焼き方だろう。

♫に鰹茶漬けを頼んだが、これもまた旨い。



<明神丸の鰹のタタキ>

■7日目 32番～24番

高知市の本日の日の出は7時01分、日の入は16時59分という。寺の参拝時間は7時から17時なので、ほぼ太陽が出ている時間と一致する。

昨夜から泊まっているホテルはなかなか快適なホテルだ。立地がよく航空会社のCAも泊まっている。朝食の内容も良い。ビュッフェスタイルながらも朝から鰹雑炊や鰹のタタキが食べられる。さすが高知だ。

第32番、禅師峰寺は高い山の上にある。高知港を見下ろし、桂浜にある龍馬像近くの灯台の灯りも見える。

第31番、竹林寺も山の上にある。観光客向けの寺で高知の名所である桂浜と高知城のセットで観光名所になっている。そのため境内も整備されており、五重塔に紅葉が見事に調和して苔の庭も素晴らしい。



<竹林寺の五重塔>

第30番、善楽寺は高知の一宮の神社の隣にある。申し訳ないが神社に負けている。

第29番、国分寺の本堂は重要文化財で、酒絶地蔵がある。友人に教えてあげたい。

第28番、大日寺は奥の院に行く途中にユニークな石仏群がある。奥の院には爪で掘ったという爪掘り薬師があり、隣には名水が湧いている。

昼には国道に面したうどん屋に立ち寄る。私は“親子とじうどん”を注文した。親子丼の具をうどんに乗せたようなもので、たっぷりの量で2人分くらいある。それでも私はペロリと食べてしまったのは旨いからだ。四国は讃岐だけうどんが旨いのではなく高知も旨い。その理由はやはり出汁で、鰹の出汁が効いていて汁が抜群に旨い。

第 27 番、神峯寺は運転手の地元だという。

山の上にある寺で、かなり上まで車で登ってくれる。大型バスは登れないので、大型バスの乗客をジャンボタクシーで上までピストン輸送する仕事もしているという。

車を降りてからも急な坂道と階段を登り、寺にたどり着く。運転手お勧めの名水が湧いており、水筒に汲み参拝する。綺麗な寺でヒバの木の緑に階段の赤い手摺、紅葉の赤黄のコントラストがいい。

第 26 番、金剛頂寺も高い山の上にある。室戸岬周辺にはこの寺を含めて 3 つの寺が並んでおり、室戸三山と呼ばれている。ここで生まれ育った運転手の説明では、室戸三山の西にあるので地元では西寺と呼んでいるという。山の寺にしてはそれなりの規模の大きな寺だ。

室戸岬が近いこの付近は田舎の漁師町になっており、潮の香りも相まって私好みの独特な雰囲気漂っている。

第 25 番、津照寺（しんしょうじ）は中寺または津寺と呼ばれている。この寺の本尊は海の安全を守る「舵取り地蔵」で階段を上まで登ると竜宮城のような門がある。この階段もそれなりにきついで、姉さんもイモウトもアイアイも息が上がっている。それでもアッコは元気で鐘を鳴らしている。

第 24 番、最御岬寺は室戸岬にある。東寺とも呼ばれている。見事な寺で相撲の土俵もある。

■御厨人窟（みくろど）

室戸岬を回って少し行くと御厨人窟という洞窟がある。かつて、ある人物が海を臨むこの洞窟で修行をした。

その人物とは佐伯 眞魚（さえきの まお）、その眞魚がこの洞窟で修行をした時に、ここからは空と海しか見えなかったのが、空海と名乗ったという。

空海はここで修行した後に 30 才で遣唐使として唐に渡った。遣唐使の留学期間は 20 年だが、それを 2 年で帰国した。理由は分からない。天才と言われた空海には 2 年で充分だったのかもしれない。

空海は 774 年に讃岐で生まれた。ここで修行したのは 20 代だから 1220 年くらい前のことになる。そして 835 年没なので 61 才まで生きた。ちなみに弘法大師という名は約 100 年後に醍醐天皇からの諡（おくりな）なので、ここで修行して生きている間はずっと空海だった。

残念ながら洞窟は立ち入り禁止になっている。しかし運転手のコネなのか分からないが鍵を持ったおじさんがやってきて中に入れてもらった。御厨人窟を見たくて参加したという姉さんは大感激している。

洞窟は 2 つあって、向かって右の小さい方が生活した洞窟で、左の大きい方が修行の洞窟という。修行した洞窟は奥行き 15m くらい左右 10m くらい、高さは高い所で 5m ほどあるが隅に行くと低くなる。振り返って外をみると確かに空と海が見える。残念ながら入口には柵や鳥居があってなかなか空海の気分にはなれない。



<御厨人窟の左の修行した洞窟内部と内部から外を見た景色>

第四章 徳島県 23番から1番

■漁師町の温泉はコミュニティセンター

本日の宿泊は高知と徳島の県境を越えてすぐの徳島県海陽町にある宿で温泉もある。海沿いの温泉なのでしょっぱいかと思いきやそうでもない。湧出温度は低いがアルカリ泉のいい温泉で、そのためか地元の人も多く訪れている。

湯船はとんでもなく広く長く、ざっと 20m の奥行がある。照明が暗いので奥の方が良く見えないほどだ。サウナもあってジャグジーもある。入浴客は宿泊者よりも地元の人が多い。それは湯船での会話を聞いていると直ぐに分かる。有名温泉地ではないので、地元の人にも来てもらって経営が成り立つということなのだろう。

同級生らしき地元の若者 3 人組が入ってきた。他愛のない会話に始まりやや深刻な会話も聞こえてくるから、完全にコミュニティセンターになっているように思える。温泉や銭湯とはそもそもそういうコミュニケーションの場だったのだろう。

地元の人が多い理由はフロントで分かった。入浴料は 1 回 610 円だが、年間パスは 37000 円と安い。シャンプーもボディソープも付いているので 1 日 100 円ならば毎日来たくもなる。

併設されている道の駅も同じようにコミュニティの場になっている。宿泊施設+温泉+レストラン+道の駅という複合施設は、愛媛でも経験しておりこのスタイルは地方では昨今のトレンドかもしれない。

併設されたレストランで夕食をとった。お遍路御膳という名前で、かなり豪華なのは良いがお遍路には関係のない内容だ。これでは何も面白くない。どうせならば料理を分けて、一の膳では空海の修行した頃の食事を再現して一汁一菜で出して、二の膳としてお遍路応援料理とでも称して出せば面白いだろう。同じ料理でも全く印象が変わるだろう。

夜は星が綺麗に見えた。オリオン座を中心にした冬の星座が太平洋の上に広がって見えたのが印象的だ。

■8日目 23番～12番

ホテルの朝食は鯛の干物と鯛の刺身も含めて結構な品数になっている。朝5時に起きて風呂に入った後なので美味しく食べられた。

朝風呂は5時30分と書いてあったが、昨夜もフロントで多少早く入れるかと聞いたら5時には大丈夫とのことだった。お遍路の参拝の前に身を清める意味も含めて朝湯に浸かるのは実に気持ち良い。

第23番、薬王寺は山の斜面にある大きな寺で見事な宝塔がある。般若心経が山にこだまする。

第22番、平等寺も山の斜面の寺で、私たちを来るのを待っていたかのように住職が現れて話をしてもらい般若心経も一緒にあげてもらった。

その住職の話が面白かった。

私たちの立っている本堂には箱車とよばれる簡素な木製の箱がある。昔の籠のようなもので見た感じのサイズは長さ150cm、奥行き80cm、高さ100cm程で、現在車輪は付いていないが、車輪を付ければまさしく箱車になる。

この箱車を使って巡礼の旅をしたのが室戸岬近くに住む父子で、息子は難病をわずらい足が動かなくなり病院に行っても悪化するばかりだった。大正時代のことなので原因不明で人生を諦めかけていたが、活路を求めてお遍路の旅にでた。息子は歩けないので箱車に乗せて父親が引いて旅をした。山岳難所も多く、この寺に着いた時には父親は体を壊し、そのためこの寺に逗留することになった。

逗留した4週間の間、祈祷や休息などにより父親が回復し、何故か息子も歩けるようになったという。その理由は休息以外に薬草など含めて食べ物効いたのだろうが、確かなことは分からない。

しかし治ったので箱車は不要になりこの寺に置いていったという。

この箱車を昼は移動に使い、夜は宿泊に使ったというので、車椅子というよりキャンピングカーだと住職は言っている。

それにしてもこのサイズでは親子二人で寝るのは相当に辛かったのに違いない。



<箱車 車輪は付いていない>

第21番、太龍寺はロープウェイに乗って行く。このロープウェイが凄い。高さ&長さがあって、それを支える最初の支柱は高さ15mもあり頑丈にできている。その地上に出ている部分よりも長い25mも地下に埋まっているという。

第20番、鶴林寺には立派な三重の塔がある。寺の名前にちなんで鶴のスタンプを押してくれる。ここで39番の延光寺で押してもらった亀のスタンプと合わせて鶴と亀が揃うことになる。

第19番、立江寺は立江駅まで徒歩5分、住宅街の真ん中にある。

第18番、恩山寺は農家の家々と小高い山の麓にある。綺麗な紅葉とイチョウが迎えてくれた。

昼食はまたしてもうどん屋だ。ただ日曜日の昼なので店は混んでおり、事前に予約していたが席の確保が精一杯のようだ。それでもこの店は運転手とはツーカーらしく、素早く対応してくれた。実にありがたい。

大きな海老の天ぷらが2つも入った天ぷらうどんが640円とは安い。そして旨かった。徳島市内に入ると渋滞している。運転手も焦り始める。

第17番、井戸寺は立派な本堂と、寺の名前が示すように「おもかげの井戸」がある。5mくらいの深さで水面に自分の姿を見ることができるとご利益があるという。

渋滞で時間がかかり、急いで参拝するが、納経所で御朱印をもらうのに時間がかかる。

第16番、観音寺は住宅地の中にある小さい寺で、ここも納経所で時間がかかる。

第15番、国分寺の駐車場に大型バス3台あったが、境内でこのバスの乗客には会わなかった。

第14番、常楽寺で団体客と遭遇した。前の寺のバスに乗っていた団体で、さすがにバス3台分は凄い人数だ。決して狭くはない境内だが、三密になっている。そして至るところで般若心経を唱えているから壮観だ。



<常楽寺の境内>

第13番、大日寺はこぢんまりしているが宿坊もある。忙しく参拝する。5時のタイムリミットまではまだ時間があるが、次の寺までここから車で40分はかかるという。時間的にはギリギリで何とか滑り込めそうだ。

この5時で終えるというのはメリハリがあつていい。ズルズルやるのは緊張感がない。

それにしてもメンバーのこの一体感は何だろう。皆が協力して時間に間に合わせようとしている。そのため般若心経もかなり早口で唱えた。共通の目的のために励まし合い助け合う、これがお遍路効果なのだろうか。

第12番、焼山寺は標高700mの山奥の山の上にある。気温6℃と低い。四国霊場の寺の中でこの寺だけが除雪車を持っていると運転手は言っている。

山門も本堂も立派で大きい。本堂の参拝が終わり大師堂で般若心経を唱えている私たちの直ぐ後で、とてつもなく大きな音で鐘が鳴った。寺男が鐘を突いたのだが、アッコがつくような優しい鐘の音ではなく、遠い山の向こうまで届きそうな大きな音だ。

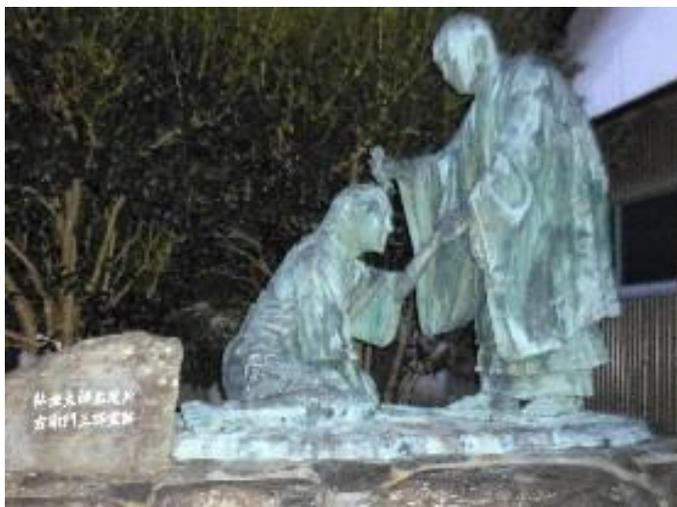
私の腕時計を見るとちょうど5時を示している。私の時計は電波時計なので1秒の狂いもない。ここの寺男も電波時計を持っているに違いない。

■逆打ちのご利益

本日の予定していた参拝が終わり、運転手の計らいで帰り道に衛門三郎（えもんさぶろう）の碑に立ち寄ってくれた。

閏年の「逆打ち」でご利益が3倍になるという理由はこの衛門三郎にある。

ことの発端は衛門三郎が空海に悪さをしたために衛門三郎に不幸が起り始めた。許しを請うために空海の後を追って何回も順打ち（順回り）で四国八十八ヶ所を回ったが、空海になかなか会えなかった。そこで「逆打ち」をして、やっとのことで会うことができ、罪を許してもらえたという言い伝えが残っている。その年がたまたま閏年だったのだろう。そのために閏年のご利益3倍ということらしい。その3倍にこだわらなければ閏年でなくても「逆打ち」でのお参りも問題ないと運転手が教えてくれた。



<衛門三郎と空海の銅像>

私は当初4年に1度の閏年なのだからご利益は4倍ではないか考えていたが、3倍の理由が分かった。この時代は旧暦、つまり太陰暦が使われていた。それは月の満ち欠けで1年を決めており、その周期は約29.53日、12カ月では約354.36日になって、本来の1年は約365.242日なので10日あまり足りない。そのために太陰暦では3年に1度、1カ月増やさないといけなくなる。それで3倍になったのだろう。

まてよ、そうすると現代は太陽暦で4年に1度の閏年を採用しているのだからご利益4倍でもいいのかもしれない。まあ、いいか。

最後の宿泊は徳島駅近くのホテルで、便利なところにある。ただし今宵は外食をやめて買い物をして部屋に入った。

■9日目 11番～1番

6時に朝食をとって6時50分出発する。この海外旅行のような早い出発にも慣れてきて、むしろこれで終わりかと思うと寂しささえも感じる。

今回の旅で初めての雨になる。といっても霧雨程度で傘をさすほどでなく、そして直ぐに雨は上がった。

もしも雨だったら、と考えるとゾットする。ロウソクや線香に火を点けるのも大変で、般若心経は暗記していない者にとっては読むのも辛い。運転手の話ではほとんど雨だったというグループもあったという。私たちの9日間は全て天気恵まれている。

それは空海のお陰か。そう考えたくもなるが、やはり巡礼の時季の問題だろう。秋から冬にかけてのこの時季の天候は比較的安定している。

第11番、藤井寺は住宅地からちょっと山に入ったところにある小さな寺で、本堂の天井に龍の絵が書かれている。

第10番、切幡寺は333段の石段があるが、車の運転を頑張ればほとんどの階段をパスできると運転手が説明してくれる。暗に運転を頑張るから華麗なテクニックを見ていてくれと言っている。

急な坂、鋭角なカーブでスリップしながらも切り返しを何回か行う。車内では「頑張れ！頑張れ！」の声がかかる。そして何とか登り切ったら一斉に拍手が起こる。この車内の一体感は何だろう。

駐車場には寺の車が4台置いてある。車のナンバーは全て10番に統一されている。それにも増して驚くのは車の車種だ。ベンツ、フォルクスワーゲン、トヨタのハイエース、そして軽トラだ。軽トラはともかくも、そんなに寺は儲かるのだろうか。

今までは般若心経を唱える時に先達が先導していたが、本日は最終日なので大師堂での参拝は参加者に任せるといふ。その役をかってでたのは若いニイガタとカワゴエ、そしてアッコだ。実に頼もしい。

第9番、法輪寺はのどかな田舎にある。歩き旅の一人遍路が参拝している。聞くと学生だという。そしてまた私は何となく嬉しい気持ちになる。

第8番、熊谷寺（くまだにじ）は入り口に大きな多宝塔があり、御詠歌が流れている。紅葉が残る中、落ち葉を集めて掃除する地元のおばさんが挨拶してくれる。

第7番、十楽寺の山門は左右に入り口がある。左から入って右からでると縁結び、その逆にすると縁切りになる。

第6番、安楽寺の山号は温泉山で、温泉が湧いている。宿坊に泊まれば温泉に入れる。境内には立派な多宝塔や本堂、大師堂、宿坊があるが、境内の写真はHP掲載禁止の札が立っている。

第5番、地藏寺の境内の真ん中には大きなイチョウの木がある。樹齢800年という木は横にも10mくらいの根を張っている。五百羅漢があるが時間の都合で見られない。地元の人はとても立派な五百羅漢なので、是非また来て下さいと言ってくれる。

第4番、大日寺は人里外れた坂の上にある。四国三十三観音の全ての観音像が飾ってある

第3番、金泉寺にも井戸がある。

第2番、極楽寺は本堂だけが高いところにある。

第1番、霊山寺は通常ここがスタートなので設備が充実している。本堂にはグループで座って般若心経をあげることができる予約席があり、私たちはそこに座りゆっくりと合唱する。さすがに私も般若心経が上手くなっている。それはそうだろう87×2回も練習した。



< 霊山寺 >

終章 満願

■ 満願

87寺を全て参拝して、最後に第88番の大窪寺を参拝すると通常は結願(けちがん)になるが、逆打ちでは1番で終わるので結願と言わず単なる満願だと先達が教えてくれる。

霊山寺の納経所で満願証明書をもらう。いや正確にはお金を出して買うのだが、私たち夫婦も含めお父さん以外は全員が買った。

皆で記念の集合写真を撮る。それぞれの顔には達成感や安堵感がうかがえ、満足そうな顔をしている。その顔は明らかに体育会系で、試合が終わったスポーツ選手のような顔つきだ。

徳島市内で遅い昼食で、最後もうどん屋に入る。やはり四国はうどんが似合う。そしてビールも注文し、祝杯をあげて労をねぎらう。

店を出て新大阪駅まで、来た時と同じように淡路島を経由してジャンボタクシーで送ってもらう。8日前も同じ景色を眺めて四国に入ったが、八十八霊場のお遍路の旅を終えて明らかに違う景色に見えるから不思議だ。

最後の別れも体育会系のノリで、気合いが入っている。涙するまでもいかないまでも、抱き合い堅い握手を交わして別れる。

■お遍路の旅を終えて

四国八十八霊場お遍路の旅は、今まで私が行ってきた国内パックスツアーとは全く違っていた。それは個人で巡った関東八十八霊場や小豆島八十八霊場の旅とも違う。どちらかと言うと海外旅行のパックスツアーのような雰囲気を感じられた。

海外という異文化の中に同じ日本人一行が置かれることにより、ある種の結束が生まれることに似ている。今回のお遍路の旅は、四国八十八霊場という非日常の異空間をそれぞれ思いが違う人たちが霊場巡りという目的で旅をする。呉越同舟に近いものかもしれない旅の中でも結束するという奇妙な人間関係が構築された。

同行二人と言われるように空海と二人で旅をするというよりも、一緒に巡った人たちとの巡礼旅、いやもっと多くの人たちと一緒に旅なのかもしれない。それは過去に四国お遍路を旅した全ての人たちと一緒に巡っているような気分になり、そうすると同行二人ではなく、同行一億人、同行日本人かもしれない。

さて、四国八十八霊場の次はどうしようかと考えていると先達が興味深い霊場を勧めてくれた。それは「四国別格二十霊場」で、四国には八十八霊場以外に別格二十霊場というのがあるという。88に20を加えると人間の煩悩の108になる。もっともらしい数字になるので八十八霊場の後に回る人も多いという。

この別格二十霊場は1970年頃に創設されたというから、組織としてはまだ新しい。しかしそれらの寺は弘法大師ゆかりの寺ばかりなので、歴史がある。

そして何しろ“別格”だ。この言葉に人は弱い。

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合っって各項目を5段階で評価し、委員会として評価値を算出する。

評価の基準は、5は驚き感動、4は普通に良い、3は可もなく不可もない、2は普通に悪い、そして1は失望落胆としている。

総合点（平均値）で5段階の75%、つまり3.75をオススメの目安としている。特に4.00を超えるには驚き感動が少なくとも1項目以上あるからオススメ度は高い。

湯の里小町温泉「しこくや」は泉質3、風呂4、料理5、コスパ、サービス4、建物・部屋4、立地環境3、総合点3.83になった。コスパは直接支払っていないので未評価とした。

泉質は低張性弱アルカリ冷鉱泉、pHは8.4、湧出温度は18℃となっている

宍喰温泉「ホテルリビエラしにくい」は泉質4、風呂4、料理4、コスパ、サービス3、建物・部屋4、立地環境4、総合点3.83になった。コスパは直接支払っていないので未評価とした。

泉質はナトリウム-炭酸水素塩泉、pHは8.6、湧出温度は29℃となっている

■旅の記録

実施は2020年12月6日（日）～14日（月）の9日間、その行程を以下に示す。

- ・1日目 新横浜駅8時48分発の新幹線乗車、新大阪駅9時に集合して、ジャンボタクシーで淡路島経由四国入り、88番～85番参拝、昼食はさぬき市「八十八庵」で打ち込みうどん、宿泊は高松市内「ホテル パールガーデン」、ホテルで夕食
- ・2日目 7時20分宿出発、84番～72番参拝、昼食は坂出市内のセルフうどん店「こだわり麺や」でうどん、宿泊は丸亀市内「オークラホテル丸亀」、ホテルで夕食
- ・3日目 7時10分宿出発、71番～61番参拝、昼食は四国中央市内の「レストラン松」の鯛めし、宿泊は西条市小町温泉「しこくや」、夕食は宿の松茸や鯛の会席料理
- ・4日目 7時宿出発、60番～49番参拝、昼食は今治市内の「彩菜食堂」
松山市内「松山東急REIホテル」泊、夕食は松山内の居酒屋「わん」で九州料理
- ・5日目 6時50分宿出発、48番～41番参拝、昼食は久万高原のJAのレストランで田舎料理の食べ放題、宿泊宇和島市内「JRホテルクレメント宇和島」、
夕食はホテルのレストラン
- ・6日目 6時50分宿出発、40番～33番参拝、昼食は四万十市の「四万十屋」で鰻重、
宿泊は高知市内「クラウンパレス新阪急高知」、夕食は「明神丸」で鰹のタタキと鰹茶漬
- ・7日目 7時宿出発、32番～24番参拝、昼食は安芸市「国虎屋」でうどん、宿泊は海陽町宍喰温泉「ホテルリビエラしにくい」、夕食はホテルのお遍路御膳
- ・8日目 6時50分宿出発、23番～12番参拝、昼食は小松島市のうどん屋「たの久」、
宿泊は徳島市内「スマイルホテル徳島」、夕食はコンビニで弁当を購入しホテルの部屋にて食べる
- ・9日目 6時50分宿出発、11番～1番参拝、13時30分終了し記念撮影、昼食は14時10分に徳島県藍住町のうどん屋「塩ごころ」、17時10分に新大阪駅到着、
夕食は新幹線内にて弁当、20時帰宅

費用は2人で約44万円になった。これはGOTOの割引や地域クーポンを使用した結果の費用になっている。

- ・ 阪急交通社払い込み 2人分で39万円。元々のツアー代金は60万円だが、この費用にGOTO割引21万円が適用されて39万円
さらにGOTOの地域クーポン9万円分を入手
- ・ 御朱印 26400円(300円×88)
寺毎に300円を納めるが、今回は運転が代行してくれるので前払い

以上が最初に支払った金額になる。また参拝道具やツアー代金に含まれていない食事や飲み物の合計が約113860円になる。基本的にはGOTO地域クーポンが利用できるが、端数や利用できない店もあり実質の出費は約23860円になる。

- ・ 参拝道具 約11000円(白衣×2、袈裟×2、納経帳、線香、ロウソクなど)
- ・ 夕食(4回2人分) 約12860円(松山市4851円、高知市5016円、徳島市約2000円、
帰路の新幹線で約1000円)
- ・ 昼食(9回2人分) 約20000円(平均1000~2000円、鰻重のみ3260円×2)
- ・ 土産物 約50000円(ミカン3箱とうどん15個を配送、その他)
- ・ 飲み物その他 約20000円(1日平均で約2200円)

最後に、私が9日間の納札に書いた願い事を忘備録がてら記しておく。

- ①健康維持向上、②周りの全ての人たちと仲良しに、③旅の充実、④旅のチカラ研究所の発展、⑤ゴルフ上達、⑥落語・ギターなど復活、⑦コロナ予防、⑧家族の幸せ、⑨夢多き人生、とした。